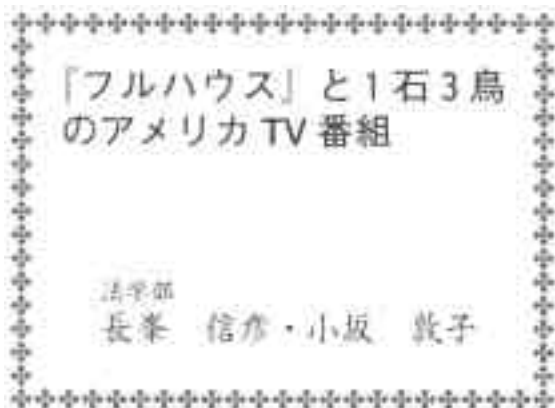


れをfiler à l'anglaise [= stip away after the English fashion] とやりかえす。Brewer によると 文無し のことを、フランス語では 'je suis Anglè' [私はイギリス人だ] と言う、とある。こういうのをXenophobiaというけれど、これは、イギリス国内でも見られることであって、スコットランド嫌いでは有名なサミュエル・ジョンソン(1709-84)は、自分の編集した辞書の中で、oatsを「イングランドでは普通ウマに食わせるが、スコットランドでは、人間が主食とする。」と書いた。書かれたスコットランド人は、怒ることもなく「その通り。だから、イングランドではサラブレッドが生まれるが、スコットランドでは、すばらしい人物が輩出する。」と応じた、という。こういう英国的笑い〔イングリッシュ・ヒューマー〕で応じるゆとりは、生真面目な日本人では、おそらく通用しないだろう。

最近、『アメリカ人のまっかなホント』(第1巻)というシリーズ(現在、第24巻まで)が出た。『地球の歩き方シリーズ』が、実用的・観光旅行者向きであるのに対して、『まっかなホントシリーズ』は、国際化・情報化の激しい現代にあって、多様な世界を観る目を、主に、ことばを通じて養ってくれる大学生向き教養的啓蒙書で、楽しい読み物となっている。



何とんでも『フルハウス』!

『フルハウス』というアメリカのホームドラマをご存じですか?結構面白いコメディーなんです。

最初の作品から実に10年近くも続いていて、その間俳優も声優も(あの『大草原の小さな家』のように)ほとんど変更なしという人気ロングランです。話はタナー家で母親が急死したところから始まります。残されたのは、潔癖過ぎるほどの綺麗好きで「趣味はお掃除」という父親ダニー、大人を手玉にとることを覚え始めた小学生の長女D.J.(ディー・ジェイ)、おしゃまでわがままな次女ステフ(5歳くらい)、そしてまた赤ちゃんの三友ミシェル。そこへ育児手伝いとして二人の男性が家族に加わります。ダニーの親友でコメディアン志望のジョウイと、亡き母の弟でちょっとカッコいいロックスターのジェスイ(主人公)。この3人の男性が3姉妹を養育しながら展開するドタバタが、実に楽しく、ジョーク満載で描かれます。

ある日父ダニーがTVリポーターとして晴れ舞台に立つことに。D.J.とステフはお祝いを贈ります。D.J.からはネクタイ。さてステフからは??かわいらしい手作りの品のようなのですが、誰にも何だかわからない。そこへ、製作者のステフがささず "Try on, Daddy!" (パパ、付けてみて!) ステフを傷つけない父、されど意味不明の品。まごまごしているところへD.J.が一言。「ネクタイ止めにしては結構イケてるでしょ?」長女が助け船を出してくれたことに感謝し、父は「おまえはいい子だ」とD.J.の肩に手をやります。その時の一言が、意外にもあの "God bless you." 畏まった時の表現と思いきや、こんな軽やかな使い方もあるんですね。印象的です。(最も初期の作品)

その後ジェスイはレベッカという女性と結婚し、彼女は妊娠します。レベッカは検査結果を告げる医者からの電話口で、ひどく興奮して「ウソでしょ!ウソでしょ!」("You're kidding! You're kidding!")と喜びを連発。何かと家族全員が心配して自分を凝視する気配に気づき、くるっと皆の方を向き、落ち着いてニヤッと一言。"He is kidding."(「(心配しないで。)冗談よ。»)kiddingの用法が一発で飲み込めるような場面です。

現在、NHK-ETVで毎週金曜日18時25分から放送中。また、月~木曜日まで、深夜0時50分から

再放送も楽しめます。今やD.J.も高校生、ステフは中学生に成長しました。いつも私が思うのは、日本語台本（翻訳）のすばらしさです。ある時タナー一家が旅行に出かけ、ホテルの主人（これがまたヘンなオッサン）が両手を広げて「おっしゃれーなアリババホテルへようこそ！」と大げさに出迎える場面がありました。VTRを巻きもどして「おっしゃれーな」の原語を聞き直すとfabulous。辞書だけ引いても出てきませんね、この訳は。発見です。またステフがムシャクシャした畔に発する決まり文句、"How rude!"は、日本語では何と「超ムカツク!」。これなど実に名訳です。3姉妹の生意気ぶり（特にステフとミシェル）と男性陣のおマヌケぶり（特にジェスイ）にはきっと笑わされますよ。(I'm not kidding).それでは皆さん、God bless you! (長峯信彦・憲法担当)

1石3鳥のアメリカTV番組

「それでは皆さん、God bless you!」なんて言われてしまうと、思わず『フルハウス』を見たくありませんか。思い立ったが吉日、ぜひ見始めましょう！現在『フルハウス』以外にも、いろいろな海外TV番組がNHK教育テレビ等で放送中です。嬉しいことに、その多くは、副音声機能付のTVでしたら、英語でも聞け、多少、単語がわからなくても、なんとなくストーリーがわかります。しかも、制作者には失礼ですが、途中から、無責任に視てもけっこう楽しめます。たとえば話題の番組『ER』では、さまざまな患者が毎回登場します。そのひとりひとりに短いドラマがあり、短い場面だけでも引き込まれ、どうなるのだろう、何を言ったのだろうと、思わず真剣に英語を聴いてしまいます。実は、英語で聴けば、海外TV番組は、英誌や文化の学習の面では、1石3鳥ぐらいの効果があります。

1羽めの鳥：英語で寝言

1番のメリットは、なんといってもスピードがあって、話がどんどん進んで行くので、当然、訳する暇もなく、聞いているうちに、英語で理解し、

英語で考えられるようになってくることです。『フルハウス』を視ていれば、「おっしゃれーな」の状況の時には自然と "Fabulous!" としいう単語が浮かぶでしょう。またイントネーションで、意味が変わってくるのも、少しずつわかってくる。こうなると「寝言も英語」の日も近い。

2羽めの鳥：語いと話題が豊富な会話上手

アメリカTV番組をたくさん見ることは、語いも話題も豊富な会話上手になる近道です。語い力をつけたい人は、単語の重なりを狙って、決まった番組を続けて視るのも一つの方法。たとえば、ニュース番組なら、大きな事件は数日に渡って報道されますから、同じ単語も何回も登場し、身につつきやすいです。スポーツ中継等も単語の重なりが多いです。自分の興味ある分野・番組から始めるのがおススメ。会話の内容をぐっとアップしたい人には、NHKの衛星放送で火曜日から金曜日まで毎日14時から放送中の『ジム・レーラー』が、私の二重マル番組。大人の会話は話す内容次第。話題の豊富な会話上手をめざそう！（ただし、どの話題もそうですが、特に政治、宗教等のトピックは、T.P.O.をわきまえて、慎重に！）

3羽めの鳥：目が点!から広がる世界

3羽めの鳥は、違った価値観・文化に触れて、世界が広がること。アメリカのコメディやトークショーには、目が点になるような番組もけっこうありますが、これは、次の片岡先生の記事をご参考に。（ちなみに私のお気に入りには、『Late Night with David Letterman』。アメリカに行くことがあれば、一度、TVをつけてみてください。最初は意表をつかれた感じで、どう理解して良いのかよくわからないまま、でも、楽しく、思わず最後まで見てしまうことが多かったです）。目が点になった時は、「良い」「悪い」の判断は、とりあえず後回しにして、頭の中の「発見の引きだし」に置いておき、時々「どうしてだろう」と考えてみてください。目が点になった所から考え始めれば、新しい世界が広がります！

追記：

アメリカだけでなく、BBCニュース地、連合王

国の番組もいろいろ放映中です。こちらも、楽しんでください。またテレビで2ヶ国語放送を見るのは難しいという人には、図書館にも、英語が母国語の人向けに作成された字幕なしのビデオがいろいろあり、館内で見れますので、ぜひご利用ください。時間を作るのは楽ではありませんが、コツは、1にも2にも毎日続けること。最初はわからない所が多くても2か月続ければ、理解できる英語の量が、ぐっと増えているはずです。

(小坂敦子)



アメリカ特集の一端として、今回は特にTV番組に垣間見るアメリカ社会を紹介したいと思えます。長峯先生は日本で放映中のシットコム'sitcom'(=SITUATION COMEDY)の一つ、『フルハウス』をご紹介になりました。そこで、ここではまだ日本で見ることはできないが絶大な(?)人気を誇る3本の番組に触れてみたいと思えます。ややきわどい話にならざるをえませんが、僕のせいではありません。あしからず。

まず最初は "Married...with Children" からいきましょう。(ちなみにこのタイトル、『既婚...こぶつき』って、なんか泣けません?(オレだけか。)) フランク・シナトラのほのぼのと始まる導入曲とは裏腹に、ことあるごとにアメリカ中流家庭の隠れた下劣さを笑いのめします。主人公のAl Bundyは女性専用の靴屋で働く中年男で、High School Footballでクォーター・バックとして一試合で4つのタッチ・ダウンを決めたことだけが人生の拠り所という男です。今ではサラリーマン人生に

疲れ、性欲有り余る妻 Peggy をもてあましているくせにnude barが人好き、とまあ日本のお父さんにもありがちな中年男性像として描かれます。開始当時は可愛かった二人の子供も番組後半(この番組もアメリカのsitcomによくある長寿番組で、10年以上続いて Fox13 というテレビ局の最長放映記録を持っています。)では20代、親が親ならというやつで異性と付き合うことしか頭にない。娘のKellyはcuteでsexy、でもbimboタイプの女の子(AIはよく「愛情」を込めて "pumpkin" と呼んでいた)。息子の Bud は軽薄短小を絵に描いたような憎めない奴で、ダッチワイフ相手に愛を語るのが大好きという情けない設定です。

この下品なキワモノさに一端ハマるとなかなか抜けられません。僕の友人にもたくさんファンがいました。私の妻も、初めて渡米してこの番組を見たときは "My jaw dropped!" だったと言ってますが、実は隠れファンです。でもパーティーあたりで "That's my favorite." なんて述べると、まあ男性は "Yeah, I like it, too." なんて陽気に同意する一方、実は目をそらすときの "Bad taste!" といわんばかりの薄笑いを見逃してはいけません。女性ならさしずめ "Male chauvinist pig!" くらいに思っているでしょう。軽々しく口にするのは危険です。しかし僕はここに悲哀を感じます。ここに描かれているのは裏返しの良識なんです(と言ったら言い過ぎか?)。最後に笑うのはたいていPeggyかKellyで、AlもBudもささやかな抵抗を試みるもののいつも女性には勝てません。Alのヒーロー、John Wayneのように現代のcow boyにはなれないんです。ここにあるのは落ちこぼれたマッチョ、踏み誤った人生、絶滅危機品種としての「強い男」、そして何よりも(アメリカに限りませんが)一極的価値観を見失ったポストモダンの状況です。

こういった一抹の悲哀を感じさせずに「今」を笑うのが "Saturday Night Live" です。タイトル通り土曜日の夜にライブで、ニューヨークから放送されています。これは由緒正しきコメディ番組です。ざっと思いつくところだけでも Chevy Chase, John Goodman (The Flintstones), Eddie